「世界を変えよう基金」報告書

団体名：インドワークキャンプ団体 namaste!つくば支部
活動内容：インドのハンセン病コロニーにおいてワークキャンプ活動を実施し、快復者社会的尊厳の回復と経済的自立を促進すること。
活動期間：【ビシュナプールコロニー】　2018/9/7～9/25

プログラム実施に至った経緯と目的

私たちはインド国内のハンセン病回復者とその家族に対する差別解決を目的として活動している。ハンセン病コロニーの人々は差別が原因で進級・進学が難しく、定職に就くことができないために、物乞いで生計を立てている人も少なくない。そのため最低限度の生活環境が保障されず、その状況がコロニー外の人からの差別を更に助長させるという悪循環に陥っている。私たちはワークキャンプを実施することでコロニーの生活環境を改善するとともに、外部の人が抱く差別意識とハンセン病コロニーの人々自身がもつ被差別意識の解消を目指している。

2018 年夏キャンプ活動報告

私たちは、2018 年の夏に、３つのハンセン病コロニーでワークキャンプを実施した。活動地は、インド西ベンガル州のビシュナプールコロニー、チャクドラコロニー、マニプールコロニーである。今回の夏キャンプで、「世界を変えよう基金」から支援を頂いたのはビシュナプールコロニーのみであるため、ビシュナプールでの活動を詳しく報告する。

ビシュナプールコロニーでは、大きく分けて３つのプロジェクトを実施した。

一つ目は、ワークプロジェクトである。このプロジェクトでは、2018 年春キャンプのリサーチ結果をもとに８軒の屋根修繕を行った。劣化した屋根を剥がし、より丈夫な素材を使用した新しい屋根を取り付けることにより、雨漏りなどの問題を解決することができる。雇われたインド人のワーカー、村人、日本人キャンパーが協働で作業を行った。このワークについての事後評価は、次回の 2019 年春キャンプで行う予定。

二つ目は、リサーチプロジェクト。このプロジェクトにはビフォアリサーチとアフターリサーチの２種類がある。ビフォアリサーチの主な目的は、以後のワークキャンプに向けて、村人のニーズを把握することである。アフターリサーチは、以前のワークキャンプの事後評価が目的だ。村の各家をまわり調査を行う中で、村人と交流し、村人のことを知り、一人の人間として村人と向き合うということもリサーチの非常に重要な要素である。ビフォアリサーチでは、

コロニー内の全家庭を周り、聞き取り調査を実施した。このリサーチを通して、各家庭の就労状況や、現在抱えている問題、個人的なニーズなどを知ることができた。ニーズとしては、以前として雨漏りの問題が多く、家屋の修繕が第一のプライオリティーであるということを改めて認識した。ここで得た情報は、以後のワークキャンプにおいて貴重な判断材料となる。また、ビフォアリサーチの一環として、村人ミーティングを実施した。村人ミーティングは、村人、日本人キャンパー、現地のカウンターパートナーの３者が今後のワークキャンプについて話し合う場である。これを通して、村全体としてのニーズの把握をすることができた。家屋修繕の他にも、道路や排水溝の必要性など、公共的なニーズもあがった。アフターリサーチでは、２０１７年9月、２０１８年3月の２回のワークキャンプで実施した家屋修繕の事後評価を行った。対象の家屋を周り、聞き取り調査を行なった。新たな問題の有無や、今後同じ問題が発生した時の対処方法などを質問した。

三つ目は、進学応援プロジェクトである。ビシュナプールコロニーでは、３人の大学生への就学支援を行なっている。このプロジェクトを通して、被差別意識の改善、教育に対する理解や子供達の進学意欲の向上を目指している。３人の大学生への支援・調査が今年で２年目を迎えるなか、今回キャンプでは、次世代となる子供たちも対象に調査を実施した。教育に対する意識や学力、学校での勉強、日常の生活について調査した。成績の面では課題があったが、自ら勉強し、将来の夢を真剣に考えるなど積極性が垣間見える結果となった。

活動を通じて得た成果・反省

ハンセン病コロニーに滞在し、日々の生活やリサーチなどを通して交流していく中で、「支援者」と「被支援者」という関係ではなく、一人の対等な立場にいる仲間や友人のような関係を築くことができた。３週間の共同生活の中で、キャンパー同士もお互いを知り、仲を深めることができた。

しかし、村人と交流していくうちに、ハンセン病コロニーの人間としての彼らについて理解が不足していることに気づかされた。彼らはどのような人生を歩んできたのか、どのような差別を経験し、それに対してどのような感情を持っているのか。私たち日本人がどんなに村人と仲良くなり、対等な一対一の関係を築けたとしても、ハンセン病コロニーの一員になることは決してない。だからこそ、村人の仲間、友人としての視点から一旦離れ、外部の人間という視点から彼らをハンセン病コロニーの人間として捉え、理解しなければならない。その上で、この活動の意味を考え続けなければならないと強く感じた。私たちの活動の目的がハンセン病差別の解消である以上、これは欠かせないのではないか。今回は初めてワークキャンプに参加するメンバーが多かったということもあるかもしれないが、これが今後のワークキャンプの大き

な課題であると考える。

プログラムの達成状況

村人とキャンパーが協働でワークを実施することができた。ワークの対象となった村人に対してアフターリサーチを実施した結果、雨漏りなどの問題がなくなり、目標としていた生活環境の改善が結果として現れていた。また、雨漏りなどの問題が再度生じた場合の対処法について調査したところ、簡易的に補強するなど、ある程度の問題であれば解決できるということだった。村人が自ら問題を解決しようとする「自立性」や、「主体性」が現れていた。

ビュシュナプールコロニーでは、キャンプ期間中にフェアウェルパーティーを開催した。２、３年前のワークキャンプで開催したパーティーには外部からの参加者がほとんどいなかったが、今回のパーティーでは、コロニー外からの参加が目立った。このことから、私たちがコロニーに滞在して活動することで、周囲の人々が抱いているハンセン病に対する差別意識が少しずつ改善に向かっていると言えるだろう。

今後の抱負

ハンセン病差別の解消という目的を見失わないよう、これからのワークキャンプでは、私たちの活動がコロニーの人々とその周囲に対してどのような効果があり、そして、どのような意味があるのかを常に考えながら行動したい。

写真で振り返るワークキャンプ

村人ミーティング

進学応援リサーチ

料理の様子

ビフォアリサーチ

ワーク

次世代の子供たちを対象としたリサーチ